

電子版
No.36

2024/11/27

教文通信

発行所 | 長野県教育文化会議

発行人 寺尾真純

伊藤亜紗さん講演の要旨（2024 長野県教育研究集会記念講演）



本日は「良く生きる、社会をどう作っていったらよいか」をテーマにみなさんと考えたいと思います。

私の専門とする「美学」は、感性を扱うもので、ヨーロッパで18世紀に学問として成立したものです。人間の認識能力は上位が「知性」、下位に「感性」があるとされ、「感性は正確な認識を妨げるもの」というそれまでの考え方が変わりました。簡単に言うと「知性」の認識は、その判断根拠が説明できるのに対し、「感性」による判断は理由が言えないということ。例えば絵画を観たときに「いい」という気持ちははっきりしていても、理由をうまく言えないことがありますね。感性的な認識です。それが面白いですし、人間の大事なところを支えているのではないかと、美学は考えます。

体は一人ひとりちがいます。私は「その体だからこそ」の世界の見え方を研究しています。例えば、視覚障害で盲導犬を連れた人と、義足の人。科学や医療の分野では障害や病名で分かれていても、「自分の体の一部に、自分じゃないものを取り入れながら生きている」という視点では共通の問題を抱えているのです。

「病気になるということ」は100年ほど前、イギリスの小説家ヴァージニア・ウルフがスペイン風邪

にかかったときに書いた短いエッセイです。健康な時の頑張り方は見せかけで表面的。病気になり水平に寝ると見えなかった大きな空が見える。健康な人（直立人）が見る空と病気の人（仰臥人）が見る空はまったく違うということです。

例えば雲たちの形成変化は、意味がないけれど非常にドラマチックです。自然が慰めになるのは、自分に関心がないからだとうルフは言うのです。人間は「傾聴し気にかけるのがケア」だといいますが、そうではなく「気にかけないのがケア」だと。最後には自然が勝つ。人間のままならなさを、身体という視点から考察してみることが身体論です。

Tさんは15歳で「網膜色素変性症」を発症し、19歳で失明しましたが、陸上やゴールボールの選手としても活躍し、選手として一段落する頃に盲導犬との生活を始めました。盲導犬は、一般的に10年ほどで引退しますが、Tさんはその後もペットとして一緒に暮らしました。盲導犬を失うことは「左手をどこかに忘れてきた」気がするというんですね。盲導犬のハンドルには指をかけるだけ。「委ねる」ことで情報が「入ってくる」。それを「能動的余白」と言っています。盲導犬が亡くなった直後は、不便でも、このままでいたいという気持ち、盲導犬と暮らした記憶を喪失することへの恐怖があったといいます。

「見えない」ということは、「毎日が『はとバスツアー』のよう」だとTさんは言うのです。安全が優先され、先回りの配慮がされることで、自分が常に「障がい者役」から逃れられなくなり、自信を失っていく。マルセル・モースという文化人類学者が「利他の毒」ということを言っていますが「ギフト」はドイツ語訳で贈り物とも毒とも訳します。安全が優先にされると失敗することが許されず、挑戦も成功も、チャンスを失ってしまうのです。

そこで、ある時Tさんは泊まる場所以外決めず、お供は盲導犬のみで新潟への「逃避行」を実行しました。冒険がしてみたい、失敗がしてみたいという思いだったのです。東京から新潟に行くには、特急に乗ります。この時、駅に行くことは事前連絡したのですが、盲導犬のトイレについては、意図的に着いてから言うことにしました。前もって言うとマニュアル通りの対応になります。マニュアルでは、盲導犬のトイレは人間の多目的トイレでするのですが、Tさんの犬はタイルが苦手な土が好きだったので、できるだけ強引に従わせたくないと感じていました。結果、駅員さんが一緒に困ってくれて、犬のしたいところでさせてくれました。マニュアルは一般的で普遍的ですが、人間として一緒に考えてほしいのです。また、行き先を決めていなかった新潟駅では、駅員さんに展望台観光を勧められます。展望台は視覚障害者が来ることを想定しておらず、マニュアルはありませんでした。困った職員さんが何とかしようと一生懸命考え、どういう風景が見えるかを頑張って説明してくれて、Tさんは感動したそうです。「こういう説明をしてほしい」と要求しないことで、相手の思いが隠れることなく表され、相手のスキルも上がっていく。計画性のないところで人と人が関わることで、周りの人のポテンシャルを引き出しているのです。

年月を経てTさんの盲導犬は寿命が近づき、てんかん発作が起きる度に衰弱していきました。全盲で介護をするのは大変でしたが、支えになったのはKさん（身体表現性障害）でした。外出はできず、分身ロボットを使ってコミュニケーションをしている方です。会うことはできませんでしたが、Kさんも盲導犬も気圧変化の影響を受けやすいという共通点があり、Kさんが体調の変化を知らせてくれることでシンクロし、先がどうなるかわからない中、一緒に「サーフィンに乗ってくれる人」がいることで不安が和らぎ支えられたそうです。そして最期の日、体重は同じはずでも、魂が抜けた瞬間を、Tさんは重さで感じたのだそうです。

ある福祉事業所の会議を紹介します。結論に至ることをひたすら避ける会議です。「ちゃちゃを入れ」

て合意を避ける努力をしている。重度知的障害がある人と暮らす知恵なんですね。例えば、ずっとペットボトルを振るという動作をどう解釈するか話し合う時「眠い」など一つの解釈に決めない。外出したかもしれないし、さっきの食事がとてもおいしかったのかもしれない。解釈を一つに決めるのは危険だと職員さんたちは考えます。当然会議は3時間4時間と長くなりますが、答えを1個にまとめず、いいなと思ったところをそれぞれ生かしていきます。効率が良いとはいえませんが、利用者さんを大事にするためにそういう会議の仕方をしているのです。「個別支援計画書」がありますが、その事業所では、実態に合っていないという違和感をもっています。利用者さんたちは「個別」で生活しているわけではないし、Aさんはたまたま隣にいるBさんに影響されるかもしれない。そもそも「計画」的な世界観で生きていない。そういう枠組みに当てはめることもしっくりこないから、社会の価値観を変える支援も大事にしています。「個別支援計画書」に対する何となくの結論は「最低限遵守しながら、やるべきことをやる」ということでした。この会議の中で聞いた、印象的な言葉があります。「会議というものは、自分の価値観を疑う練習をしているんだ」というのです。自分の価値観が相対化されることによって、常に自分の考えを絶対化しないことが大切です。

最後に話したいのは、マニュアルと倫理ということです。教育の現場でも、マニュアル的なものはたくさんあり、それだけでは済まない感覚が皆さんの中にもあるのではないのでしょうか。日本は良くも悪くも社会が高度にシステム化されていて、それによって解決策を見いだしています。「手作りのケア」の入る余地がどんどん小さくなっています。その対極にあるような東南アジアの社会から日本がどういう社会なのか相対化して見たときに、これだけ社会のシステムががっちりしている国だからこそ、意識的に風穴をあけることが必要だと考えます。そうしなければ、システムを実行するだけの人間になってしまいます。マニュアルは効率的かもしれないが、1個の正解を全員に当てはめてしまう感覚があります。それにより、欲望や尊厳といったものが大切にされない感覚にもなります。それに対して倫理が必要です。倫理とは、自分と相手の関係の中で最善の選択を考えながら、創意工夫の中で手作りのケアをしていく態度です。当然、倫理には、リスクもあるわけで、両者の相互補完が重要なのではないのでしょうか。倫理を考えると、「いい加減」という言葉が大事だと考えています。「いい加減」というのは、規範とかマニュアルに対し、どのぐらいそれを揺さぶるかということです。対応する英語は reasonable です。reason、理性的・合理的なという言葉が入っています。複数の考え方、複数の価値観が存在するときに、みんなが納得するポイント、みんなが少しずつ譲歩して、「納得できる」という本当なポイントを探すという意味が、reasonable には含まれています。効率は悪いかもしれませんが、人間を大事にする倫理的な態度であって、それを非常にシステムティックな日本社会の中にどうやって作っていくのか。それが、ままたまなない体を抱えながら生きている私たちが考えなければいけない課題なのではないのでしょうか。